

連帯のメッセージ

11月にポーランド「日本美術・技術博物館マンガ」の30周年記念式典にJR総連・JR東労組で参加しました。マンガセンターのノヴァック館長から届いた連帯のメッセージをご紹介します。

JR東労組の組合員の皆様

戦後80周年のこの年に、JR東労組の皆様へ一言ご挨拶できる機会をいただき、大変光栄に思います。本当にありがとうございます。

また、それに先立ち、クラクフで開催された、日本美術・技術博物館マンガ開館30周年記念式典に、労組の代表者の方々にご出席いただいたことを心より嬉しく思います。

遠く離れているにもかかわらず、ポーランドと日本の関係史は、団結、責任、相互理解の素晴らしい例であり、それを振り返ってみることは非常に価値があると私は確信しています。この場をお借りして、是非言及させていただきます。

ロシア、ドイツ、オーストリアに分割されていたポーランドは、123年間世界地図から消しさらわれていましたが、1918年に独立を回復しました。その後1919年、多くの国と外交関係を樹立、その時ポーランドを世界で最初に認めてくれた国の一つとして、1919年3月22日、日本はポーランドを国家として承認してくれました。

ポーランドと日本の関係は、政治・経済状況、戦争、東西冷戦に左右されることなく、さまざまな形で発展してきました。すべての国家間の関係構築と同様に、外交そして政治家の交流を通して実現されてきましたが、日本の場合は皇室の方々のご訪問を通じても公式に行われてきました。また、もちろんそれだけではなく、非常に重要な社会レベルの交流によっても育まれてきたのです。

世界的に有名な映画監督、アンジェイ・ワイダ氏の絶大な尽力がなければ、マンガ美術館は存在しなかったでしょう。彼は栄誉ある稲盛財団京都賞を受賞した後、その資金を「フェリックス・マンガ・ヤシェンスキの日本のコレクションのための展示の場所」の建設に当てました。

しかし、何千人もの人々の協力なしには何も起こらなかったでしょう。無私無欲の連帯の意思表示として、ポーランドに建設中の日本博物館のために、日本中の鉄道の駅で募金を集めてくれた人々、それがJR東労組の皆さまでした。

1994年の日本美術・技術博物館マンガの開館は、これまで展覧会、シ



30周年記念式典であいさつする高橋書記長



日本美術・技術博物館の外観

ンポジウム、講演会、ワークショップ、コンサートを通じて、ポーランドと日本の関係を強化し深めることに貢献してまいりました。

ポーランドと日本の関係の独自性は、人と人との関係によって決まります。100年以上にわたる相互の交流には、人々に関する数多くの様々な物語があり、これは誇張ではありません。これらの物語を生み出すのは、人なのです。ユゼフ・ピウスツキ元帥のような政治家、第二次世界大戦中にユダヤ人を救った領事杉原千畝を含む外交官、プロニスワフ・ピウスツキなどの学者や研究者。「連帯」の創設者であり元大統領であったレフ・ワレサ、ポーランド人のフランシスコ会修道士、ゼノ修道士は東京と広島で孤児やホームレスの世話をしました。アンジェイ・ワイダ、タデウシュ・カントール、浜野敏弘、粟津潔、原研哉、佐藤浩市など枚挙にいとまがありません。また、日本人のフレデリク・ショパンの音楽に対する愛をも無視することはできません。

歴史の中ではいろいろありましたが、100年以上にわたる両国の関係を今日の視点から見れば、何よりも素晴らしい人々、友好的な関係、共感とサポートがあり続けたことがよくわかると思います。

日本美術・技術博物館マンガ 館長 カタジーナ・ノヴァック

日本美術・技術博物館マンガと日本語学校

1994年11月30日にクラクフ・ヴァヴェル城の対岸に「日本美術・技術センター」が開館しました。1993年の着工式には、ポーランド側から文化大臣、クラクフ知事・市長、アンジェイ・ワイダ監督など、日本側から兵藤日本大使、JR東労組 松崎委員長（当時）夫妻など、全体で200名が出席しています。

日本美術マニアだった故フェリックス・マンガ・ヤシェンスキ氏が収集した日本美術コレクションを常設展示するために、アンジェイ・ワイダ監督が中心になって資金調達をしました。JR東労組として1992年から「一人一週間10円カンパ」、街頭カンパ、チャリティー映画会などをおこない、100万ドルを寄附しました。日本政府も300万ドル寄附し、建物の設計は日本人建築家の磯崎新氏がおこないました。日本とポーランドの友好と平和のシンボルとして桜の木を植樹し、大きく育っています。

2004年に日本語学校がオープンし、現在に至っています。

サークル大会開催のお知らせ

JR東労組陸上部 フォトリゲニング大会

開催日 2月11日(火)～12日(水)

集合場所 つばめの杜ひだまりホール (常磐線山下駅)

宿泊箇所 ホテルグランド新地

参加費 20,000円

参加報告 1月27日(月)まで

※フォトリゲニングとは、地図を使い野外に設置されたチェックポイントを制限時間内に回り、チェックポイントで見本と同じ写真を撮影し、得点を競います。



ご冥福をお祈りいたします

やじんき法律事務所 弁護士 渡辺千古氏(享年82歳)におかれましては、入院加療中のところ2025年1月8日に永眠されました。

渡辺弁護士は会社の理不尽な姿勢を許さず、私たちに助言と指導をしてくださいました。そして、JR東労組と共にあらゆる組織破壊攻撃に対してたたかっていた皆さまにあらためて感謝申し上げます。

ここに生前のご厚誼に深く感謝し、安らかにご永眠されますよう、心よりお祈り申し上げます。

第51回定期中央委員会

日時 2月6日(木) 10時30分から

場所 コルソホール(浦和)

議題 (1) 第43回定期大会以降の経過と当面の取り組みについて

(2) 労働協約・協定の締結承認について

(3) 2025年度暫定予算(案)について

(4) その他

羽越本線列車脱線事故から19年

12月25日、5名のお客さまが亡くなり、お客さま31名と乗務員2名が負傷した「羽越本線列車脱線事故」から19年を迎えました。その当日、中央本部・信越地本・本部運輸車両部会の代表は、現地に立ち、慰霊を行いました。

私たちは「命」の重さを再認識し、二度と繰り返さないことを誓いましたが、一方で今のJR東日本の安全に関して、疑問の声が多く寄せられています。

特に、「安全は経営のトッププライオリティ」と言いつつ、経営幹部が新幹線の列車分離を「たまたま」と言ってしまうなど、安全を軽視していると言わざるを得ない状況です。職

場では組織再編や統括センター化などの会社施策によって、教育訓練が不十分なままに慣れた業務に従事する機会が増えたほか、「新たなジョブローテーション」によって、経験を深めないままに次の職場へ異動してしまう現実もあります。そして「融合と連携」の名の下に業務量増加と多能化が進み、多くの組合員・社員が疲弊しています。

私たちは自分たちを律しつつも、おかしなことには「おかし」と声を上げることが必要です。JR東労組に結集し、「責任追及から原因究明へ」を掲げ、安全風土を再確立しましょう。